俺ガイル１４巻ＩＦ
ＥＤ集

黒いオオカミ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。１４巻の作者が考えていたエンディング集です。基本、１４巻は読んでいますし、どういうエンディングかも知っています。ｐｉｘｉｖにも投稿しています

・基本的には、アンチ・ヘイトはしません。微アンチ表現はありますが・・・

目次

ＥＤ１「それ以上の関係」――――　１
ＥＤ２「一世一代の告白」――――　４
ＥＤ２．５「ありえないＥＤ１」　９
ＥＤ３「遠距離」――――――　13
ＥＤ４「本物の現実、偽物の夢」　17
ＥＤ４．５「ありえないエンド２」　23
ＥＤ５「偽物の関係」――――――　27
ＥＤ６「狂気の愛情」――――――　33
ＥＤ６．５「ありえないエンド３」　40
ＥＤ７「間違った青春の終わり方」　45
はちさきエンド――――――――　52

ED1「それ以上の関係」

「わりいな。雪ノ下。来てくれてさ」
「それで、何の用かしら？　比企谷くん」
奉仕部とは違う教室に俺は雪ノ下を呼び出したのは、一世一代の告白の為である。だからこそ、勇気を振り絞って、告白することにする。
「雪ノ下・・・俺と親友になってほしい！」
「ごめんなさい。無理よ」
ものの数秒で、俺は断られたのだ。
出会った時は、雪ノ下も俺は雪ノ下のことも分からなかったし、雪ノ下も俺のことは分からなかったのだ。だが、今は違う。友達以上の関係である親友になれるんじゃないのか？　そんな期待があったが、雪ノ下からすれば親友には値しないのだろう。
俺は落ち着き、違う言葉にした。
「・・・なら、友達になってくれないか？」
「悪いけど、私はあなたの友達も親友も絶対に嫌よ！」
凛とした瞳で、はっきりと友達も親友も無理と言われたのが、傷ついていく。正直な

話、雪ノ下となら、本物になれるのではないか？　自分自身、本物とは分かりかねないが、それでも、雪ノ下となら本物になれると期待していた。だが、帰ってきた言葉が拒絶であった。俺にとって、どうすればいいのか、分からなかった。

　自身の瞳からは涙が溢れ出ていく。本物なんてないんじゃないのか？　そんな考えが、頭によぎる。

「・・・わりぃ、時間を取らしてしまって。もう帰るわ」

「待ちなさい！」

「なんだよ。また、新たな黒歴史を1ページ作ったんだ。枕に埋まって、めいっぱい泣きたいんだよ」

「今のあなたを見ていると、自殺しそうで怖いのだけれど？」

　雪ノ下からすれば、俺が自殺しそうに見えたらしい。実際、考えてしまったさ。黒歴史やトラウマを除く正真正銘の生涯初の親友や友達の告白を断られたのだ。雪ノ下となら、本物になれると考えていたさ。だからこそだ・・・

「・・・あぁ、そうだよ。まぁ、安心しろよ。雪ノ下の名前は書いたりしないからさ」

「・・・そういう気づかいはいらないわよ。確かに、あなたの親友という関係も友達としての関係も断ったわ。だけど、それ以上の関係になりたいからよ。だからこそ、断ったのよ」

それ以上の関係？　意味が分からん。雪ノ下が俺に好意を抱いていると？　過去の黒歴史やトラウマを経験した俺がいるのだ。そもそも、好意を抱いているというそぶりが微塵もないはずだ。

「はぁ・・・鈍いのね。まぁ、いいわ。はっきり言うわ」

雪ノ下は一呼吸整えて、言葉を発した。

「私と結婚前提のお付き合いをしてほしいの。比企谷くん」

「・・・え、重い」

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　完

ＥＤ２「一世一代の告白」

「ゆきのん、どうしたのさ?」
「そうですよ。雪ノ下先輩」
「雪ノ下さん、何ですか?」
「ごめんなさい。私自身、一世一代の告白をするのよ。それの立会人になってほしいの」
　私の話を聞いて、由比ヶ浜さんや一色さんや1年生になった小町さんも気難しい表情であった。分かっているわよ・・・だけど、恥ずかしいのよ。
　私がそんなことを考えていると、彼、比企谷くんが奉仕部に来てくれた。
「・・・雪ノ下、どうしたんだ?　後、小町と一色と由比ヶ浜も?」
「ごめんなさい。彼女たちは、私の一世一代の告白の立会人よ」
「えっと、あの雪ノ下先輩。私たち、他の場所に行きますから、お二人で勝手に・・・」
「はっきり言うわ。恥ずかしいのよ。私にとっては、自分の口から告白するなんて今までなかったからよ。だからこそ、立会人になってほしいのよ」
　私は「すう、はぁ・・・」と息を整える。落ち着きなさい・・・言うのよ。
「・・・ねぇ、比企谷くん。聞いてほしいの」

「お、おぅ・・・」
「・・・比企谷くん。私と友達になってほしいのよ！」
「「「・・・へぇ？」」」
　比企谷くんや由比ヶ浜さんや小町さんや一色さんもキョトンと驚いていた様子であった。そうね、私が友達になってほしいなんて告白するのは驚くのは無理もないわね。
「まず、先に謝っておくわ。比企谷くん。最初にあった時に「友達になってほしい」って告白したのに、断ったんですもの。虫唾がいいのも仕方ないでしょうけど、あなたのことをあまり知らなかったからよ」
「・・・えっと、ゆきのん。告白ってそっちなの？」
「えぇ、そうよ。私自身、自慢ではないけど、異性から「彼女が無理なら、友達になってほしい」って告白はされるんだけど、全部断っているの。だけど、今まで、自分自身で友達になってほしいなんて告白なんてしなかったもの。だからこそ、一世一代の告白なのよ」
「あの・・・小町的にポイント低いですよ。雪ノ下さん。流石に、この流れで友達って・・・」
「・・・そうね、小町さん。この流れで友達はなかったわね。親友の方が良かったかしら？」

「・・・えっと、そういう意味じゃ・・・」
「やっぱり、心の友と書いて、心友と呼んだ方がいいかしら？」
「・・・どこのガキ大将ですか、それ？」
　由比ヶ浜さんや一色さんや小町さんや比企谷くんが残念そうな目で私を見ていた。何でそういう目で見るのよ。
「はっきり言いますけど、雪ノ下先輩。平塚先生並みに残念ですよ」
「な！　なんで、平塚先生並みに残念なのよ！」
「ゆきのん、流石に擁護はできないかな？」
「あなた達よく聞きなさい！　私はね、少し考えたのよ。比企谷くんの言う本物について」
「お、おう」
　彼は驚いていた様子であった。この流れで本物が出てくるとは思っていなかったみたいね。
「私自身、考えたのよ。あなたの言う本物がなんなのかって・・・。だけど、奉仕部や一色さんとの関係では比企谷くんのいう本物にすらないからよ。だって」
　私は、一呼吸を整えて、ハッキリといった。
「部活仲間や依頼主の関係であって、友達ではないからよ」

私は比企谷くんを見据えながら話を続けることにした。
「だからこそ、友達や親友になってほしいのよ、比企谷くん・・・いいえ、友達や親友になってくれるなら、八幡の方がいいかしら？」
「ゆきのん・・・」
「雪ノ下先輩・・・」
「雪ノ下さん・・・」
「無論、由比ヶ浜さんや一色さんや小町さんもよ。いいえ、あなた達も友達や親友になってくれるなら、結衣やいろは小町・・・先輩後輩に友達はおかしいでしょうけど、私と本物になってほしい！」
私は、彼に手を差し伸べておく。これが私の答えだがらよ。
「（雪ノ下は、本物になってほしいって手を差し伸べているんだ。だったら、俺は・・・）分かった、雪乃。俺と友達になってくれ」
俺は雪ノ下の手を掴み、固い握手をする。俺にとっては、人生初の友達かもしれないな・・・
「雪乃とそれ以上の関係になれるように努力するよ」
「ゆきのん、うぅん・・・雪乃。友達だからって、ヒッキーは諦めないからね！」
「・・・雪乃先輩。私も先輩のこと、諦めてませんからね？」

「お兄ちゃん。まさか、友達ができるなんて、夢みたいだよ」
「ねぇ、あなた達に聞きたいんだけど・・・諦めないやそれ以上の関係ってなにかしら？」
「「「分からないんかい!!!!」」」
やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。完

ＥＤ２．５「ありえないＥＤ１」

「あの・・・比企谷先輩、どうしたんですか？　そのいろはちゃんを通して、呼び出して・・・」

「あぁ・・・わりぃな。書記ちゃん。来てくれてさ」

「・・・藤沢ですからね」といった女子高生は、黒髪のお下げに、眼鏡をかけており、化粧は皆無で、スカートは長めに履いている藤沢こと、藤沢佐和子である。

俺は藤沢を誰も使っていない教室に呼び出したのは、告白をするためである。俺は勇気を振り絞って、声を出した。

「なぁ・・・藤沢。俺、藤沢のことが好きなんだ。海浜高校との合同会議であった時に一目ぼれしたんだ。俺と付き合ってほしい」

「・・・へぇ？」

書記ちゃん・・・いや、藤沢が驚くのも無理はないだろう。俺との認識は海浜高校の合同の時しか面識がないのだからだ。しかも、彼女は副会長の本牧と付き合っているはずだ。はなから叶わない恋も目に見えているさ。

それでも、告白をしたのは、恋人のいる女性に告白した勘違いナルヶ谷という称号を

手に入れるためだ。
　雪ノ下や由比ヶ浜や一色が勘違いでなければ、俺に恋をしているはずだ。誰かを選んで、俺たちの関係を失うくらいなら、はなから叶わない恋をして、振られて、悪い噂がたてば、あいつらも俺のことを諦めるはずだ。
「わりぃ、あまり面識ないのに告白して、気分を害させて・・・気持ち悪いなら、気持ち悪いって言ってくれ」
「いえ・・・比企谷先輩のことを気持ち悪いなんて言いませよ。その告白嬉しいです。いいですよ。付き合ってください」
「あぁ・・・悪い、時間を取らして・・・へぇ」
　どうやら、俺の耳も腐っているみたいだ。何故か、藤沢さんが告白に了承したらしい。
「・・・えっと、すまん。俺の耳が腐っているようだ。書記ちゃん。付き合ってくださいって聞こえたんだが・・・」
「藤沢です。いえ、比企谷先輩の耳は腐っていませんよ。告白に了承しましたよ」
「・・・藤沢。確か、副会長の本牧がいるよな？　なんで、ＯＫしたんだ」
「・・・付き合うなら、佐和子でいいですよ。副会長の本牧先輩とは付き合っていませんよ。告白はされましたが、私には初恋の人がいるからって、振っています」
　どうやら、本牧は振られたらしい。いやまて・・・初恋。俺って、藤沢とそれ以外面

識があったけ？

「わりぃ、藤沢。初恋？　俺と藤沢って、面識って他にもあったけ？」

藤沢は神妙な顔をしながら、俺を見つめていた。あれ・・・なんか、地雷を踏んだ？

「・・・比企谷先輩は覚えていないみたいですが、私は文化祭の時にいたんです。文化祭の運営状況が悪くても、頑張ってくれて・・・それなのに、何故か比企谷先輩がさぼっているって悪く言われたのが腹立たしかった！　合同会議の時も、本来なら私たち自身で何とかしなければいけないのを、比企谷先輩が頑張ってくれた！　それで・・・好きになったんです！」

「ふ、藤沢・・・」

「でも、諦めていました。だって、雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩やいろはちゃんみたいに可愛くないし、美人でもない。私みたいな地味子なんて好きになってくれないなんて思っていました。だから、比企谷先輩！」

「お、おう」

「好きです！　誰が比企谷先輩のことを悪く言おうと、私は比企谷先輩のことが大好きです！　だから、比企谷先輩が私のことを好きなのが嬉しいんです」

俺は最低だな。藤沢は本気で俺のことを好きなのに、それに対して気付けなくて、振られるために告白して、藤沢の気持ちを踏みにじっているんだ。中学時代、俺を笑いも

のにしていた連中と同レベルだろ・・・

だったら、俺は藤沢の本気の気持ちを答えなければいけないよな。

「その・・・藤沢、一つ訂正させてくれ」

「はい、なんでしょうか？」

「そりゃ・・・あいつらと比べれば、劣るさ。しつれいだけどな。だけど、藤沢は十分可愛いさ。俺にもったいないくらい」

「あ、ありがとうございます」

「だから、改めて告白させてほしい、藤沢・・・いや、佐和子。俺と付き合ってくれ！」

「はい、喜んで！」

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　完

ＥＤ３「遠距離」

「比企谷くん、ごめんなさい。由比ヶ浜さんや一色さんや小町さんもいてもらって」
「いえ、雪乃先輩。どうしたんですか？」
「ゆきのん、どうしたのさ？」
「どうしたんだ、雪ノ下？」
「雪乃さん、どうしたんですか？
　奉仕部の部室に、私と一色さんと小町さんと比企谷くんと由比ヶ浜さんもいた。
　すぅ、はぁ・・・と私は息を整える。落ち着きなさい。小学生時代に慣れていることじゃない。
「比企谷くん、一度しか言わないから、よく聞いてほしいの」
「お、おぅ」
「私は、あなたと出会えて嬉しかった。由比ヶ浜さんも一色さんも小町さんも出会えて嬉しかった。奉仕部という場所での過ごした時間は凄く楽しかった」
「・・・ゆきのん」
「・・・雪乃さん」

「・・・雪乃先輩」
「・・・雪ノ下」
「でもね、比企谷くん、あなたのことが大嫌いなの・・・」
　場の時間が止まったように感じたが、雪ノ下がそのまま話を続けた。
「私ね、留学するのよ。アメリカにね・・・。今度は何年後に帰ってくるか分からないの。あなたがプロムを成功させなければね。だから、大嫌い。あなたには一色さんや由比ヶ浜さんや妹だけど小町さんもいるわ。良かったじゃない。平塚先生の依頼の孤独体質が改善できて。だから・・・あなたの退部を認めるわ！」
「雪ノ下、俺は・・・」
「ゆきのん、そんなの卑怯だよ！」
「何が卑怯なのよ！　さっきも言ったじゃない！　比企谷くんのことが大嫌いなのよ！
　千葉村や文化祭や修学旅行や生徒会選挙や今回のプロムだって、結局はあなたがすべて解決した！　だから、嫌なのよ！　私が、私が・・・無能みたいじゃない。だから、だから・・・」
「だって、ゆきのん・・・泣いているよね？　本当は、ヒッキーのことが好きだからだよね！　こんな形でヒッキーと付き合えてもアタシは嬉しくない！」
「雪乃先輩、私もです。私自身、先輩のことが好きですけど、こんな形で譲ってもらって

も、全然うれしくない！　雪乃先輩から寝取ってでも奪わないと先輩と付き合えても意味がないんです！」
「雪乃さん・・・お兄ちゃんが雪乃さんのことが好きなのは明白ですよ！　こんな形で離れたら、それこそ小町は雪乃さんのことを一生恨みますよ」
「雪ノ下、俺はお前が例え何年も会えなくても、お前のことが好きなんだ。例え、一色や由比ヶ浜と付きあったとしても、自分の気持ちに嘘をついた関係なんて欺瞞なんだよ。だから・・・」
　私は自分の手から血が出るくらい強く握っていた。だからこそ、ハッキリと言うことにした。
「ふざけないで！　私の気持ちも知りもしないくせに！　ええ、そうよ。比企谷くんのことが好きよ！　だけど、どれくらいまで留学するのか分からないのよ！　遠距離恋愛なんて続かない！　それこそ、向こうで私が好きな異性や同姓を見つける可能性だって高いのよ！　比企谷くんはそれでもいいのかしら？」
「それでもいいさ！　そりゃ、辛いさ！　お前が他の男か女と関係になったら、傷つくさ！　だから・・・」
「そう・・・だけど、私が異国の他の異性や同姓のことが好きになっても恨まないで頂戴ね。八幡」

「あぁ、分かったよ。雪乃！」
「雪乃先輩、先輩のことを振り向かせて、寝取っても恨まないでくださいね！」
「ゆきのん、私もヒッキーのことを諦めたりしないからね！」
「雪乃さん、千葉の兄妹ですから、小町がお兄ちゃんを物にしますからね」
やはり俺の青春ラブコメまちがっている。　完

ＥＤ４「本物の現実、偽物の夢」

「ねえ、八幡。今日は私とお弁当を食べるのだけど？」
「雪乃。悪いけど、ハッチーとお弁当を食べるんだけど？
「雪乃先輩と結衣先輩、八幡先輩と弁当を食べるんですけど？」
「雪乃さんと結衣さんといろはさん、悪いですけど、お兄ちゃんとお弁当を食べるのは小町とですよ？」
「はぁ、あんたらふざけんじゃないよ！　八幡と弁当食べるのはあたしだよ！」
　３年生になった雪ノ下と由比ヶ浜と川崎。２年生になった一色。１年生になった小町によるお弁当を奉仕部で食べているのだ。
　俺事、比企谷八幡は、雪ノ下と由比ヶ浜と一色と川崎と交際しており、小町も介入している。俗にいうハーレムというやつだ。
「ひ～き～が～や!!」
　映画シャイニングを思い出す光景であった。扉を斧で壊し、そこから顔を覗かせているジャック・トランスを思い出す。
「ちょ、平塚先生。怖いっす！」

「黙れ！　奉仕部で不純異性交遊をしやがって！　衝撃のファブリット!!」
「ぐふぅ」と声とともに、俺の腹にこぶしが入る。久しぶりに喰らったよ。あれ、意識が遠のいていく・・・
目を覚ましたのは・・・病室であった。後、黒髪のロングヘアーの巨乳の２０代後半から３０代前半くらいの美人の女性のスカート短めのナースと目が合った。
「入江先生！　入江先生！　ヒキタニくんが目覚めました！」
名前を間違ったまま、そのまま病室から出て行った。
数十分後、医者らしき人同伴であった。医者は、ビジネス用眼鏡を掛けており、２枚目のイケメンであった。３０代前半くらいの男性であった。
「鷹野さん、ヒキタニではなく、比企谷くんですよ・・・目を覚ましたんだですか・・・」
あぁ、ナース服の鷹野さんていう人は間違って言っていたいたけど、この人は俺のことをちゃんと名前で呼んでくれるらしい。
平塚先生。あの人、病院で目を覚まくらいってどれくらい強く殴ったんだよ・・・
「あの、入江先生って言うんですか？　平塚先生にどれくらい強く殴られたんですか？」
「殴られたって・・・キミは、入学式の時に事故に遭って、１年間寝たきりだったんだ」
はぁ・・・入学式の事故は覚えているが、１年間寝たきりって意味が分からん。
「いやいや、冗談を言わないでくださいよ。１年間寝たきりって・・俺は総武高校に通っ

て、ちゃんと授業を受けて、部活に通った記憶があるんですよ？　可笑しなことを言わないでくださいよ」
「・・・比企谷くん、キミは夢を見ていたんだ。自分にとって都合のいい夢を・・・」
「何言って・・・夢って言うけど、痛みだってあった。匂いだってあった。つらい経験だったあった。だから・・・」
「比企谷くん、なら聞くが、キミはその総武高校でどんな授業を受けたんだい？　実際に体験したなら、話せるだろう？」
「え・・・いや、殆ど寝ていたんで・・・」
「なら、キミはどんな本を読んだんだい？　無論、キミが創部高校に通っていた時に読んだ本をだ」
「・・・覚えていないです」
「なら、キミが所属していた部活の内容と部活動を話してくれないかな？」
　俺は入江先生に分からせるために、奉仕部のこと、今まで受けてきた依頼内容や部員のことを話した。
「まず大人としての意見を言わせてもらうけど、奉仕部という部活は流石に難しいんじゃないかい？」
「なんで、可笑しいんですか？　別にボランティアくらい・・・」

「なら、質問するがその奉仕部は常日頃からゴミ拾いや草抜きのようなことをしていたのかい？　それに、もし、依頼で失敗して、依頼主から恨みを買ったり、トラブルにならないなんて断言できるのかい？　はっきり言うけど、そんなのないなんて断言できるかい？」

喉から声が詰まるような気分であった。そんな訳がない。そんな訳・・・

「それに、千葉村の件や文化祭の件や生徒会選挙の件は学校側が解決しないといけないし、千葉村や文化祭の件は、下手すれば、いじめに発展しかねないのに、どうして、そこまでの事態に発展していないのだい？」

「それは平塚先生が・・・」

「いくら学校の先生でも、庇えるものと庇い切れないがあるさ。特に文化祭は、それこそ苛めに発展するだろうし、それこそ、君自身が停学か悪くすれば退学だってありえるが？」

「じゃあ、今まで体験してきたのは・・・」

「医者として、辛い現実を患者に突きつけたくないけど・・今までのは夢なんだ。だが、どんなにいい夢でも、いつかは現実を見なければいけないんだ。だが、キミは若い。人生のやり直しくらい幾らでも聞くはずさ。だから・・・前を向きなさい。無論、相談には乗るさ。一応、精神科医の資格も持っているんだ」

入江先生が俺の肩をポンと叩いてくれた。心にはぽっかりと虚しさが広がっていく。

夜になり、少し考えていく。あの後、入江先生はこう言ってくれた。

「君が望むなら、予約さえしてくれればカウンセリングをするよ。それ以外にも、私自身、草野球の監督をしているんだ。君自身が参加する気があるなら、それにも来てほしいんだ。多少は君の気分もすぐれるはずさ・・・」

入江先生なりの優しさだと思う。だけど、あいつらを失った心の痛みが決して安らがない。

この世界にも、小町はいるさ。だが、夢の世界の兄思いの小町じゃなく、俺のことをゴミとしか見ていない小町。夢の世界では、放任でもちゃんと見てくれた親だが、こっちの世界の親はネグレクト同然である。だからこそ、一人暮らしである。平塚先生や雪ノ下みたいに、俺の書いた「高校生活を振り返って」を否定してくれる存在はいないだろう。いたとしても、詐欺師や偽善者である。

分かっていたさ。あれが夢ではないのかと・・・

「あいつらに、会いたい・・・」

入江先生や病院に迷惑を掛かるだろうが、それでも構わない。

俺は必死に屋上まで上がっていく。怪我した足の為、痛いが、それでもあいつ等を失った痛みの方が断然痛かったさ。

屋上に付き、金網をよじ登る。夜空は綺麗である。もっとも、星なんてないが

「偽物でも、現実のくそったれの世界よりかはましかもな」

現実は糞である。嘘つきの人間や詐欺師だっている。そんな、世界から去ってやる。

俺は飛び降りると、頭から落ちてゆく。地面に付いたときは、頭が割れそうであり、血が流れ出てゆく。

「意外と痛いんだな・・・」

簡単に死ねると思っていた。だけど、簡単には死ねないらしい・・・ジンジンと痛みがあった・・・あぁ、意識が遠のいていく・・・

「ハッチー、ハッチー・・・大丈夫?」

「・・・あぁ、大丈夫だ」

あぁ、あっちは夢だ。そうだ、あれは夢なんだ。ただの悪い夢だ。

「八幡、あなたはこっちを選んだのね?」

「・・・え?」

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　了

ＥＤ４．５「ありえないエンド２」

「比企谷くん、かおりを通して連絡来たんだけど、どういう了見なの？」
「あぁ、わりぃ、仲町さん。来てくれてさ」
髪は黒髪のショートカットヘアー、顔は可愛い分類であり、化粧は薄く、スカートは短めの今どきの女子校生である仲町さんこと、仲町千佳である。
本来なら、海浜高校の出身なのだが、総武高校の使われていない教室に来てもらっている。一応、平塚先生を通して、許可をいただいている。
まぁ、なぜ、この場所に来てもらったのは一世一代の告白の為である。無論、振られるためのだ。理由は簡単だが、雪ノ下たちが俺の勘違いでなければ、好意を抱いていると思う。友達としてではなく、異性としてのだ。だが、誰かを選べば俺たちの関係は崩れるため、ワザと降られ、雪ノ下たちに諦めてもらうためだ。
「仲町さん・・俺、初めてあった時、キミに一目ぼれしたんだ。俺と付き合ってくれ！」
中学時代のナル谷並みの告白である。告白する自分自身も思うが、ハッキリ言ってキモイ。仲町さんに同情するレベルのだ。
こんな告白をすれば、確実降られるはずだ。しかも、折本が仲町に告ったと噂付きで

だ。
「・・・うん、いいよ。付き合おっか」
「わりぃ・・・時間を取らせて。すまん、嫌な思いをさせて」
「いやいや、比企谷くん。告白にＯＫしたんだけど！　なんで降られたみたいな対応するのさ！」
　どうやら、俺の耳は可笑しいようだ。告白にＯＫした？　いやいや、ない。仲町さん自身、折本同様、俺はないなんて言っていたはずだ。
「えっと・・・一応、聞くけど、告白にＯＫしたんだ？　その、あった時って、折本同様俺のことはないなんて、雰囲気かもしだしてたんだが・・・」
「えっと、その時は、この場所を借りて謝らさせてもらうね。ごめん・・・比企谷くん。キミのことをろくに知りもしないのに見下して・・・」
「お、おう・・・まぁ、別にいいよ。気にするな」
「かおりがさ、言ってたんだ。比企谷くんとは彼氏は無理だけど、友達ならありかなぁって・・・それで、比企谷くんのことを色々と話してくれてさぁ・・・」
「・・・いや、それは分かったが、何でＯＫしたんだ？」
　俺がそういうと、仲町さんがどこか悲しそうな表情であった。あれ、俺何か変なことを言ったか？

「えっとさ、覚えていない。幼稚園と小学校低学年・・・正確に言えば、小学校４年生までだけど、比企谷くんとは知り合いなんだよ」
「・・・知り合い？　わりぃ、トラウマとかは結構覚えているんだが・・・」
「はは・・・まぁ、そうだろうね。じゃあさ、ひーくんって言ったら分かるかな？」
「・・・えっと、ちーちゃんか？」
俺は仲町さんのことを、ちーちゃんのことを思い出した。幼稚園や小学校の頃の友達であり、幼馴染である。そして、目が濁った原因である。
彼女がいじめられており、勇気を振り絞って、それを助けたら、いじめられた。そして、親の転勤でいなくなり、その上、小町の家出も相まって、そういう意味合いでは本当にボッチになった。
「ごめん・・・ひーくんって、昔は目が濁っていないからさ。会った時に分からなかったからさ」
「まぁ、色々あってな・・・」
「・・今更、都合がいいのは分かっているんだけど、私はさぁ、ひーくんに助けてもらった時からさ、好きなんだ！　私はかおりみたいにスタイル良くないし、それほど美人でもないけど、けど・・・」
俺自身、最低だと思えてきた。仲町さん・・・いや、ちーちゃんのことを知りもしな

いのに告ったのだ。中学時代、俺のことを笑いものにした連中を思い出す。
　そもそもだが、振られるために告ったりしている時点で、最低もいいだろう。
「仲町さん、まず、言わせてほしいんだ！」
「何かな？」
「まず、俺はさぁ、雪ノ下や由比ヶ浜や一色に振られるために、告ったんだ。だから、すまん。謝らせてほしい。ごめん・・・」
「あははは・・・そうなんだ。ひーくん、私のこと、あまり知らなさそうな態度だったし、予想はついていたよ」
「だけど・・・もう一度、改めて告白させてほしい。好きだ。ちーちゃん。いくら、振られる為に、告ったとしても、今度こそ本気で好きだ！」
「うん、いいよ。ひーくん！」
　やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　了

ED5「偽物の関係」

「雪ノ下、どうしたんだ？　奉仕部に呼び出して？」
「うん、ゆきのん？　どうしたのさ？　あたし達も呼んで」
「雪乃先輩、どうしたんですか？」
「雪乃さん、どうしたんですか？　小町達も呼んで？」
「来てくれてありがとう。比企谷くん。由比ヶ浜さん。小町さん。一色さん。お茶を飲みながら、話そうと思うの・・・」
　俺たちは雪ノ下に呼ばれて、奉仕部の部室に来ている。長机にはティーカップと人数分の紅茶が入れられていた。
　もっろも、当の雪ノ下は、どこか気難しそうな表情をしていたが・・・
「まず、比企谷くん。あなたに話しておきたいことがあるの」
「お、おう」
「まず、比企谷くん。私自身、自慢ではないのだけれど、異性から告白をされているの。無論、友達としての告白ではなく、異性としてのね」
「えっと、ゆきのん。私たち、いないほうが・・・」

「ごめんなさい。今から話すことは、由比ヶ浜さんたちにも関係があるの。だからこそ、ここに居てほしいの」

「すぅ、はぁ・・・」と雪ノ下は息を整えて、話し出した。

「さっきも言った通り、異性からかなり告白はされているの。だけど、全て断っているわ。だって、相手のことはあまり知らないから。そもそも、魅力も興味も湧かないから・・・だけど、あなたは違う」

「雪ノ下・・・」

「奉仕部と出会って、色々と過ごしてきた。ひねくれているけど、優しくて、暖かくて、変なところでは意固地だけどね。だからこそ、あなたのことが、友達としてではなく、異性として好きよ。あなたに私の人生を全て捧げてもね」

雪ノ下の言葉を聞いて、俺は反応に困る。重い発言もあったが、由比ヶ浜や一色や小町がいるからだ。由比ヶ浜や一色や川崎はどこか悲しそうな表情で見つめており、小町はどこか嬉しそうな表情である。それでも、俺は雪ノ下の返事をしなければいけないだろう。

俺はなんとか雪ノ下の言葉に返事をしようとした瞬間、雪ノ下が話しを切り出した。

「だけどね、比企谷くん。あなたと付き合うことはできないの・・・ごめんなさい」

「ねぇ、ゆきのん？　どういうこと！　それって、あたし達に譲るために・・・」

「別に、そんなんではないわよ。好きな人を簡単にはいそうですか、と譲るわけないじゃない！」

雪ノ下が悲しそうな表情で、話しを続けた。

「私は結婚するの。正確に言うと、結婚前提のお付き合いのね」

「えっと、雪乃先輩？　それって、やっぱり、家のことですかね？」

「ええ、そうよ、プロムの件でお母様・・・いえ、雪ノ下家と対立したからでしょうね。本来なら、大学を卒業してからなのだけど、早められたのよ」

あぁ、なんとなく想像がつく。プロムを成功させるために、色々とやったのだ。ははのんいや、雪ノ下家にとっては気に入らないのだろう。

だが、この言い方からすると、たとえ、プロムの件がなくても、強制的に結婚はなっていたのだろう。人様の家にどやかく言うつもりはないが、ハッキリ言って、雪ノ下家はかなりえげつないのだろう。

俺はそんなことを考えていると、雪ノ下が話しを続けた。

「葉山君とのね、結婚するのよ。昔、家同士で結婚させることを考えていたのよ。本来なら、大学を卒業きに結婚させるつもりだったのだけどね」

「それって、何とかならないの？　ゆきのんが不幸だよ！」

「・・・それとも、あなた達は駆け落ちしてくれるのかしら？」

「・・・駆け落ちってなに？」
「・・・愛し合っている男女が結婚するために、田舎や海外へ逃げることよ。だけど、現実的には不可能よ。あなた達は、私のために、大学進学を諦めてくれるのかしら？」
　雪ノ下の言う通りだろう。人生を全てなげうってまで、簡単なものではない。そもそも、雪ノ下家がすんなりと諦めてくれるとは限らないだろう。
「だけど、ゆきのん・・・」
「雪乃先輩、そんなのって・・・」
「雪乃さん・・・」
「だから、あなた達にお願いがあるの。比企谷くんを幸せにしてほしい。私が彼を物にできない代わりにね。比企谷くんも私のことを忘れてほしいの。彼女達があなたの支えになってほしい。本物になってほしい。ただそれだけよ」
　雪ノ下は、そのままどこかに行った。俺は追いかけることができなかった。俺は呆然とするしかなかった・・・

　数年後・・・
　俺たちは総武高校を卒業した。雪ノ下の存在を完全に忘れることはできずにだ。

「ハッチー、会いたかったよ」
「先輩、会いたかったです」
「おいこら、引っ付くな！　あと、いろははいつも会っているだろうが！」
俺は、最終的には一色と由比ヶ浜と交際した。
由比ヶ浜は違う大学だが、休日にはこうして会うようにしている。一色は俺と同じ大学に入学した。あとは・・・
「あんたら、八幡が嫌がっているでしょ」
「八幡、鼻伸ばしすぎ、キモい！」
「ぐ腐腐腐！　ちょっと、引っ付きすぎだよ！」
「ちょー、受けるんですけど！」
「ねぇ、一色さんや由比ヶ浜さん。引っ付きすぎだよ？」
何故か、川崎と留美と海老名と城廻と折本とも交際？　している。
川崎は、居酒屋のバイトで知り合い、川崎に言い寄ってくる男たちからの男除けとして。留美や城廻は、教師を目指すために、掛け持ちで塾の講師で知り合い。そこから、留美や城廻に言い寄ってくる男除け。海老名や折本は同じ大学に入り、戸部みたいな連中からの男除け・・・ザックリ言えば、全員男除けとして交際している。
というか、男除けのつもりで交際しているなら、なぜにぐいぐいとくるのだろうか？

好意でもあるのだろうか？
念のために言っておくが、目は濁ったままさ。だが、雪ノ下がいなくなった消失感から、変わることを決意した。結衣やいろはから服のコーディネートをしてもらい、キモがられないように目をきょどったり、緊張したりせずに、話し上手・・・話術トレーニングをした。ザックリ言えば、上辺だけの付き合いを努力したのだ
理由は簡単だが、教師を目指すためだ。平塚先生に色々と救われた部分があったし、雪ノ下や俺みたいな奴を減らしたいが為である。そして、俺みたいな偽物の関係ではなく、本物を見つけてほしいためだ。
（なぁ、雪ノ下・・・結局、本物って何なんだろうな？）
俺はそんなことを考えながら、ポケットから煙草の箱を取り出し、一本だけだし、百均ライターで火をつける。
傍から見たら、ハーレムリア充の戯言である・・・
やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　了

ED6「狂気の愛情」

数年後・・・

俺達は、総武高校を卒業した。俺と一色は同じ大学に入り、由比ヶ浜は違う大学に入る形となった。

そんな俺たちは、とあるバーにいた。

「ねぇ、ヒッキー。あたし、ヒッキーのこと好きなんだよね。あたしの胸好きなだけ揉んでもいいよ?」

「先輩。私も先輩のことが好きですよ。妹みたいな女の子といっぱい愛し合いましょう?」

ピンク色ぽい茶髪のロングの髪、ピンク色のセーター。Iカップくらいはあるだろう胸が特徴的だ、薄茶色のロングスカートが色っぽさを垣間見せていた。化粧も薄く、モデルか女優並みの美人の彼女は由比ヶ浜結衣である。

泡栗色の髪のロングの髪、白色のオフショルダーと黒いタンクトップ、濃い青色のズボン。服越しでも分かるくらい胸は大きくなっており、DかEくらいはあるだろう。化粧も薄く、モデルか女優並みの可愛らしい彼女は一色いろはである。

俺事、比企谷八幡は、緑色のカッターシャツ、黒色のズボンとシンプルである。全身ユニクロコーデである。目は濁っており、髪はくせ毛があるため、彼女たちをひっぺらがしているとは到底思われないだろう。

最初は、リア充みたいに髪を暗い茶色に染めて、ピアスして、チャラチャラした服にしようとしたが、元カノから「あんたが、そういう服きたら、ヤンキーか、よくてハングレだけど」と言われたため、こういう服にした

「わりぃ、今は誰かと付き合う気はないんだ」

俺はそういって、くいっとコーヒー・リキュールを飲み干す。由比ヶ浜と一色はジャック・ローズを一口飲み、一色は話しを切り出した。

「セ～ン～パ～イ！　そう言いますけど、千葉大のミスコン１位のめぐり先輩や結衣先輩並みにおっぱいが大きい書記ちゃんも振ってるじゃないですか！」

城廻めぐり先輩は、大学デビューで、ほんわかの可愛い系から、モデルや女優や総武の女子ですら足元に及ばないほどのガチの美人になっていた。スタイルも結構良くて、千葉大のミスコンで１位だった雪ノ下さんを退け１位になった。そんな美人でスタイルの良いめぐり先輩の告白を振った奴がいると、違う大学なのに結構有名になった。そんな馬鹿な奴がいるんだなぁ・・・と思っていたら、どうやら俺らしい。うん・・・

もう一人の書記ちゃんこと、藤沢沙和子は、本牧とは別れたらしい。本牧が大学の

サークルで知り合った女性と浮気し、別れたみたいだ。
彼女自身、本牧とは別れたため、俺や一色のいる大学に入ったのだが、藤沢自身も大学デビューし、化粧もし、眼鏡からコンタクトに変え、胸が由比ヶ浜並みの為、結構モテている。そんな彼女の告白も振っている
「そうだよ。姫菜やサキサキや留美ちゃんやかおりんの告白も振っているじゃん！」
姫菜こと、海老名姫菜は同じ大学に入った。同じ学部で、彼女からも告白されたのだが、振ったのだ。
サキサキこと、川崎沙希は違う大学だが、居酒屋のバイトで知り合って、これもまた彼女に告白されたのだが、振ったのだ。
留美こと、鶴見留美は塾の講師のバイトをしていたら、塾の生徒として知り合った。これもまたまた彼女に告白されたのだが、振ったのだ。高校時代の三浦並みにスタイルは良かったし、雪ノ下並みの美人だけど・・・
かおりこと、折本かおりは同じ大学に入った。同じ大学で、彼女からも告白されたのだが、またまたまた振ったのだ。
てか、こいつらに知られているんだろうか・・・情報がばがばじゃない。情報保護法ってなんだっけレベルまでである。ただ、これだけは言わせてほしい。
「・・・あいつらは本物じゃないんだよ。偽物と付き合っても、本物なんかにはなれない

んだよ！」

そう言って、お代わりをいただいたコーヒー・リキュールを飲み干していく。由比ヶ浜はそんな俺を見ながら、ジャック・ローズを飲み干すと話し出した。

「ねぇ、やっぱり、ゆきのんのこと・・・まだ好きなんだ」

「あぁ、そうだよ。付き合っている奴をすきになっちゃいけない法律なんてあるのか？」

「そうじゃないよ・・・ゆきのんはいなくなって1年経つんだよ？　隼人くんも優美子と付き合っているんだよ。いい加減、違う人と恋愛して忘れるべきだよ」

ゆきのんこと、雪ノ下雪乃は行方不明になった。

葉山と同じ大学なのだが、同居しているわけではないのだが・・・連絡をつかないのが1～2週間続いた為、警察に行方不明届けを出したらしい。

最初は、雪ノ下家の令嬢のため、警察は誘拐の線で捜査したが、犯人から連絡がないのと、現金などは盗まれていないことから失踪と判断された。

日本では、行方不明者は年間８万人もいるのだ。行方不明者捜査のために、国民の血税こと税金を使えないし、警察も楽な方がいい。いくら令嬢といっても、探すのに時間はかかるし、毎日事件や事故は起きるのだ。ザックリ言えば、割に合わないことよりも、楽な方がいいのだ。

マスコミも雪ノ下家の令嬢がいなくなったことを大きく取り上げた。それこそ、雪ノ

下家が強制結婚のことや闇の部分などなどだ。下々の人々は身勝手な正義で雪ノ下家を叩いたりして、せっかく決まっていた雪ノ下さんと大企業の息子との縁談もなくなったこともあり、雪ノ下夫妻は葉山を攻め立てた。やれ「お前が雪乃のことをちゃんと見ていればよかった」だの、「お前との弁護士契約は破棄する」だのだ。そんな風に攻め立てられたこともあり、葉山も精神的に鬱になっていたところを三浦に慰められ、交際した。

「・・・悪いが、気分悪いは。これは俺の分だ」

俺は自身の飲んだ分のお金は置いといて、そそくさと出ていく。由比ヶ浜が「ちょ、ヒッキー。まだ話の途中だよ!」と言っていたが、どうでもよかった。

俺は自宅に付いた。俺の自宅は、2階建ての3DKの築年数40年くらいのぼろい家である。

俺は誰もいないことを確認し、2階にあがり、物置部屋に入ると、下に物入れのドアを開けると、はしごがあった。そこから降りて、扉の鍵を開けると、畳6畳分で、トイレと簡易用のシャワーが付いており、和風の布団とミニ冷蔵庫が置いてあり、そこには足かせをされた女性がいた。

黒髪のロングヘアー、化粧は皆無だが顔立ちは良いため、中々の美人である。服は男

物の服を着ているが、胸はちっぱいため、そこがマイナス点である。年は０代前半くらいだろう。彼女は誰でもない行方不明の雪ノ下である。

「・・・八幡、会いたかったわ！　お腹すいたわ」

そう言って俺に抱き着いてきた。

「あぁ・・・雪乃。優美子は作らなかったのか？」

「作っていたけど、あんなメス豚の食事なんて食べたくなわい」

「そうか・・・あぁ、分かった。適当になんか作るわ」

そう言って、俺は部屋から出てドアの鍵を閉め、はしごを昇っていく・・・

（確実に俺のものになっているよな・・・）

俺は雪ノ下を監禁した。三浦との手伝いでだ。

俺は雪ノ下と付き合えなかった心の拠り所欲しさに、三浦は葉山と付き合えなかった心の拠り所の為に、お互いがお互いに心の拠り所欲しさに交際した。が、結局は長続きしなかった。本物ではなく偽物だからだ。

その後である。三浦が雪ノ下を監禁することを提案したのは・・・三浦が葉山と交際したいが為に、俺は雪ノ下と交際したいが為に・・・

分かっているさ。監禁して、娯楽もなく、情報や外との世界を遮断し、俺しか頼れる存在がいない状況にして、俺に好意を向けさせても、結局は偽物であって、本物ではな

い。そもそもこの生活だって、ずっと続けられるものではない。

（それでもいいさ。俺が雪ノ下を物に出来れば・・・後は、田舎にでも上京して、雪ノ下と暮らせれば、それで・・・）

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。了

ＥＤ６．５「ありえないエンド３」

「ねぇ、ヒッキー。あたし、ヒッキーのことが好き！」
「比企谷くん、あなたのことが好きよ」
「先輩、私は先輩のことが好きですよ」
　奉仕部に雪ノ下と由比ヶ浜と一色による３人から俺は告白されている状況である。３人が３人とも美人の為、はたから見たら嬉しいかもしれないけどね・・・
　ちなみに、平塚先生がいなくなって、奉仕部の存続が危うかったが、奉仕部は一色の生徒会長権限により、続いている状態である・・・
「あぁ、悪いが・・・俺、彼女がいるんだわ」
「「はぁ!?」」
　３人が３人とも驚いている状態であった。まぁ、うん・・・だって、俺自身、彼女いる素振りなんて見せてないし・・・
「ねぇ、比企谷くん・・・あなたはまた、自己犠牲をしているのかしら？」
「・・・そんなんでわねぇよ」
「えっと、ヒッキー。ゲームとかアニメのキャラが彼女とか言わないでよね？」

「・・・違うからな」
「・・・先輩、流石に妄想とかは笑えませんよ?」
「・・・妄想でもないからな」
こいつらは、俺のことを何だと思っているのだろうか。まぁ、そりゃ・・・俺とて彼女ができるわけと思っていないが・・・
そんなことを考えていると、俺の彼女が奉仕部に入ってきた。
「はっちゃん・・・遅いよ!」
俺の彼女である川崎京華こと、けーちゃんである。幼くて、愛らしい・・・幼稚園児だし、無知だし、人間の悪を知らないからこそ、俺にとってはこの子なら本物になれると思ったからこそ付き合っているのだ。
まぁ、もっとも雪ノ下達からごみを見るような目で見ていたが・・・
「ねえ、ヒッキー。何で、京華ちゃんと付き合っているの? バカなの?」
「先輩、流石に笑えませんよ?」
「あなたは、リスクリターンは高いと思っていたのだけれど?」
まぁ、うん・・・そうなるわな。小町に紹介したら、「ごみぃちゃん・・・」とゴミを見るような目で見ていたし・・・
そんなゴミを見るような目で見られている時に、川崎が来たのだ。

「けーちゃん、ここにいたんだ。てっか、何この空気!?」
「あ、さーちゃん。そこにいるお姉ちゃん達が怖い」
　けーちゃんが、川崎に泣きついていた。一色がやるとあざといが、けーちゃんがやると、全くもってあざとさがなくていい。
　そんなことを考えていると、けーちゃんに泣きつかれたのか、川崎は雪ノ下達を睨みつけていた。
「・・・あんたら、こんな小さい子を泣かして楽しいの？」
「違うからね！　ねぇ、サキサキ・・・ヒッキーと京華ちゃんが付き合っているんだけど、いいの？」
「あぁ、そういうことね。別にいいよ」
「別にいいって・・・川崎さん。あなたは自身の妹さんと交際宣言しているのよ？　あなたはそれでいいの？」
「だって、八幡のことはよく知っているし、それに・・・」
　そう言って、川崎は俺の唇にキスをした。その光景を３人は驚いていたが・・・
「京ちゃんが高校生になるまでは、アタシと交際してくれるって言ったからね。それに、京ちゃんが高校生になってもアタシとは結婚してくれるらしいからね」
「そういうことだ。悪いな・・・まぁ、お前らならいい奴と付き合えるさ。行こうか、京

ちゃん。沙希」
「うん、行こう、はーちゃん」
　３人が唖然と立っていたが、俺たちは奉仕部を去ることにする・・・

「悪いな、こんなことに付き合ってくれて・・・」
「別に構わないよ。あんたのこと、異性として好きだからね」
「うん、京華もはっちゃんのことが好き！」
「いや、そういうのじゃなく・・・俺があいつらと誰とも付き合う気がないから、けいちゃんと付き合っているって言ったんだがな・・・」
　俺はあいつらが好意を抱いていることに感づいていた。だが、もし、あいつらのうち誰かを選べば、確実に俺たちの関係は崩れるだろう。だからこそ、諦めてもらうために、川崎の妹であるけいちゃんと付き合っているから無理ということにした。
　まぁ、最も、川崎が俺に好意を抱いていたから、けいちゃんとお付き合いを認める代わりに、交際しろと言われるとは思われなかったが・・・しかも、川崎の両親の公認だし・・・
「あんたの妹である小町も、大志と交際しているからね。姉弟同士で交際っていうのもありだろうし・・・」

しかもだが、小町とゴミ虫こと大志がうちの親公認で交際しているらしい。親父・・・小町に近づくのは八幡でも許さんなんて言っていたくせに・・・

「でだ・・・今日さ、大志があんたの家に来ているから、あんたもウチで食べてく？」

「あぁ、そうさせてもらうわ」

「やったー！　はっちゃんといっしょ！」

（それに・・・今回のために、勝負下着と媚薬と精力剤とコンドームも買っておいたしね。けいちゃんも興味津々だし・・・）

比企谷八幡は知る由もない。本当の意味で青春を間違いで終わらせるとは、彼自身、思いもよらないだろう

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　了

ED7「間違った青春の終わり方」

平塚静は、頭を押さえながら、俺たちを見ていた・・・

俺自身も、色々と迷惑をかけていると思っている。千葉村、文化祭、生徒会選挙、プロムの件でもだ・・・とくに、平塚先生が総武からいなくなるため、せめて、暖かく迎えたかったが、そういう風にできなかった自分自身が腹立たしく思えてしまう。

「君たちはあれか？　そんなに私にそんなに胃に風穴を開けたいのか？　それにだ・・・比企谷。キミは太宰治か何かか？」

「いや・・・そのすみません。こんな形で送るとは思いませんでした」

「・・・君達はどうするつもりだ？　彼女たちのことはどうするつもりなんだ？」

「まぁ、責任は取りますよ・・・俺自身がまいた話ですし、親父達にも頭を下げますし、バイトしてでも工面しますよ」

「俺も佐和子のことは責任取りますよ」

「俺も優美子のことは責任取りますよ」

「俺は小町のことはちゃんと責任取りますよ」

「我も責任は取るからな・・・」

俺達自身、なんでこんなことになったのかを思い出す・・・

＊＊＊＊＊＊＊回想＊＊＊＊＊＊＊

俺達は、全員無事に3年生に進級した。めぐり先輩も無事に合格したし、小町や毒虫こと大志も総武高校に入学できたし、1年である一色や遊戯部も無事に進級したことに対するお祝い事である。

本来なら、平塚先生も混ぜるべきだったが、お酒を飲むことと、平塚先生はちゃんとしたことで送りたいという気持ちがあったため、呼ぶことはなかった。

念のために言っておくが、呼んだのは、比企谷兄妹、生徒会メンバー、雪ノ下姉妹、相模グループ、折本グループ、葉山グループ、川崎姉弟、遊戯部、材木座、戸塚、中学生組である。

ちなみに、会計の稲沼に関しては、連絡がつかなかったため、呼ぶことはなかった。大和と大岡は？

「隼人。あーしのお酒飲めないわけ？」

「はは・・・優美子飛ばしすぎないか？」

葉山は三浦の介抱していた。三浦と葉山が飲んでいたのは、ワインである。安物のワインであったが、初めて飲むものだからこそ、悪酔いしていた。

「戸部君、梅酒美味しいね」

「ちょー、美味しいしょ。ゆっこちゃん」
「玉縄くん、チューハイレモン飲んでみる」
「あぁ、ありがとう。仲町さん」
「相模くんだっけ？　凄く可愛いね、やっぱり、南の弟なだけあるは・・・」
「ありがとう。遥先輩」
　戸部こと、戸部翔とゆっこは安物の梅酒で飲みあっており、玉縄と仲町千佳は缶のチューハイレモンを飲んでいた。遊戯部の二人と遥は安物の缶ビールを飲んでいた。完全に酔っていた。
「本牧くん。レモンアワー。美味しいですね」
「藤沢さん、あんまり飲みすぎない方が・・・」
　書記ちゃんこと藤沢佐和子と、副会長の本牧はレモンアワーを飲んでいた。本牧が、藤沢の解放している形ではあったが・・・
「大志くん、どう美味しい？」
「あぁ、旨いっす。ビールって意外と美味しいんすね」
　川崎大志こと大志と、比企谷小町こと小町は瓶ビールを飲んでいた。
　ちなみに、材木座達は・・・
「ふむ、この日本酒はなかなか美味だな」

「義輝ちゃん、お腹たぷたぷしている」
「厨二のお兄さん、ちょー面白いんですけど」
「お腹タプタプしている」
「お腹気持ちいんですけど」
「ちょー気持ちいいい。このお腹」
　材木座は日本酒を飲んでおり、元小学生組と京ちゃんノンアルコールだが、何故か酔った気分になるコーラを飲んでいた。
　当の主役である俺事比企谷八幡は・・・
「ねぇ、八幡。美味しいね」
「戸塚くんだっけ、男なのにすごく可愛い。ねぇ、比企谷。酔いつぶれているとか受けるんですけど！」
「あのさ、ヒキタニ。ウチのウォッカ飲む？」
「ねぇ、比企谷くん。酔いつぶれちゃって、普通、こんなに女の子に囲まれて酔うなんて、贅沢ものだよ？」
「ぐ腐腐腐、ねぇヒキタニくん。サキサキが作ったカクテル飲む！」
「ねぇ、比企谷。アタシの作ったさぁ。カクテル飲もうか？」
「比企谷くん、大丈夫？　お水飲める？」

「八幡。大丈夫そう？」
「先輩、酔いつぶれてません？」
「ヒッキー。酔っているんだ。えへへ」
「泥酔谷くん。かなり酔いつぶれているわね。大丈夫かしら？」
「・・・この状態で、大丈夫そうに見えるか？」
雪ノ下の言うように、俺はほぼ泥酔に近い状態である。
俺はというと、雪ノ下姉妹、由比ヶ浜、留美、海老名、折本、相模、一色、戸塚である
「じゃあ、この高い日本酒の媚薬酒で乾杯しようか！」
雪ノ下さんが、媚薬酒を紙コップに入れて、みんなに配り渡される。
泥酔している俺に渡されても、到底飲めそうにないんですが、それは・・・
「じゃあ、乾杯！」
「「「「「「「「乾杯!!」」」」」」」」
みんなが乾杯しているのだが、殆どが酔っているので、乾杯も意味がなさそうだが・・・
まぁ、媚薬酒と書かれている時点で察するべきだったが・・・銀魂みたいになったのである。

葉山は三浦と、戸部はゆっこと、遊戯部は遥と、玉縄は仲町と、本牧は藤沢と、毒虫こと大志は小町と、材木座は京華と中学生組と合体していた。当の俺はというと・・・

「比企谷くんの凄い。お姉さん可笑しくなっちゃいそう!」

「比企谷くん。もっと頑張れるでしょう?」

「八幡、大きいし・・・」

トラブるみたいに展開になりました。俺の場合は、代る代る・・・

後々、知ったのだが、あのお酒には、強力な媚薬が入っていたらしい。しまも、あのお酒には、女子達には媚薬と排卵薬を混ぜられているらしい。

＊＊＊＊＊＊回想終了＊＊＊＊＊＊

「別に怒っているわけではないからな・・・卒業した連中のなかには、結婚して、子どもを連れてきた奴もいたさ・・・」

平塚先生は、一呼吸整えて、話し出した

「だがな・・・え?　何で、女性と全員身籠らせているんだ?　あれか?　銀魂か何かか?　しかも、身籠らせているのは、女子中学生に、同級生に、女子大生に?　太宰治ビックリすぎるだろうが!!」

「平塚先生、怒っているじゃないですか・・・」

「うっさいわ!　てっか、本気でどうする気なんだ?」

「平塚先生、大丈夫です。お母様に頼んで、費用は工面してもらいますし、比企谷くんには、雪ノ下建設で働いてもらいますので大丈夫ですよ」
「俺はバイトするっしょ！」
「俺もバイトします。仮にも、高校生ですし、無責任なことは出来ないんで・・・」
「俺もバイトします。佐和子を身籠らせた責任があるんで」
「僕も責任を取ります」
「我も責任を取る。男として生まれたからにな」
「まぁ、俺達も責任は取らせてもらいますよ。流石に、ガキではないんで」
彼らの間違った青春は間違ったまま、終わりになったようだ・・・
やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。　了

はちさきエンド

買い物終わり、沙希と俺と娘の沙夜と買い物に付き合ってくれている京華と一緒にサンマルクカフェに立ち寄っていた。
「ねぇ、八幡？　沙夜や京華に対して、甘くない？」
「そ、そうか？」
俺はそういうと、コーヒーにミルクを入れて、口を付ける。
俺が誤魔化そうとしているのをばれたのか、沙希が追い打ちをかけるように話し出した。
「・・・あのさぁ、あんた、クロワッサンとコーヒー付きのを頼んで、それを沙夜が物欲しそうにしていたら、半分あげてたじゃん？」
「べ、別に構わんだろう。それのどこが甘いんだよ？」
「そのもう半分を京華に半分あげたたじゃん？　もうすぐ、お昼なのにさぁ？」
沙希に睨まれて、俺自身、目をそらしていた・・・
沙希、怖いんだけど？　人殺しているって言われても、違和感ないからね？
「かあさん、こわい！」

「いいじゃん、さーちゃん！　はーちゃんは、子どもに甘いのはいいことなんだからさぁ？」
「沙夜。ごめん、母さんは怒っていないから！　後、けいちゃんも甘いことはいいこじゃないの！」
沙希のあたふたする姿が、可愛らしい。
白いブラウス、青いジーパンとシンプルな姿だが、スタイルがいいから、すごくエロい。自分のカミさんでもだ・・・
「八幡？　アンタ、何をじろじろ見ているの？」
「いやぁ・・・けいちゃんを見ていると、２人目欲しいなぁって・・・」
流石に、ハッキリと沙希がエロいから、ラブホにＧＯして、このまま２人目作ろうぜ！　何て、娘やけいちゃんの前で口が裂けてもいえないからな・・・
「・・・あんた、アタシも２人目は欲しいけど、子ども２人を養えるように頑張って稼いでから、考えてよね？」
「おう、分かっている」
「分かっているなら、いいけどさぁ」
今も昔も沙希は変わらないなぁなんて、思いながら見ていた。昔のことを思い出しながら・・・

川越に屋上を呼び出された為、今どき手紙かよと思いつつ、俺は屋上まで行くことにする。
俺は屋上に着くと、扉を開けた。
「アンタ、来てくれたんだ」
「まぁ、呼び出されたからな。川越」
「川崎だよ！　全く・・・」
てっきり、どっきり大成功かと思っていたが、まさか、本当に川越がいるとは思わなかったが・・・
「ねぇ、アンタてさぁ、雪ノ下さんと由比ヶ浜と生徒会長さんだっけ？　その誰かと付き合っているの？」
「いや、付き合っていないぞ？　何で、そんなこと聞くんだよ。川華」
「川崎だよ！　ねぇ、だったらさぁ、あんたのことが好きって言ったら、どんな反応するの？」
好きって言ったの？　魚のススキとかじゃなく、いや、
「ねぇ、川畠。魚のススキって言ったの？」
「川崎だよ！　あんたに告白しているのに、何で違う言葉になるのさぁ？」

「へぇ、告白？　友だちになろうっていう告白ではないのか？　川尻？」
「何で、屋上に呼んで、友達になろうなんて、告白するのよ！　愛の告白に決まっているんでしょうが！　後、川崎って、何度も言わせんのよ!!」
　やっぱり、愛しているの告白らしい・・・はて、そうなると、何で、告白をされたのか、スカラシップの件でか？　いや、まさか、それではな・・・
「あんた、まさか、覚えていないの？　あんたが文化祭の時にアタシに『サンキュー！愛しているぜ川崎！』って言ってたじゃん！」
「えっと、それでか？」
「それと、あんたがスカラシップのことを教えてくれたからじゃん！　その二つであんたのことを意識したんだけど？」
「・・・そうなのか、すまん。覚えていないんだ。川越」
　川崎がプルプルと震えていた。あれ、やっぱり、勘違いさせたのは、失礼だったな・・・
「・・・その、すまん。あまりにも、失礼だったな。川口」
「いい加減にしろ!!」
　俺の腹に一発川崎の拳が入った。ちょ、すごく痛いんだけど・・・
「あんたねぇ、川越とか、川畠とか・・・あんた、何回言えば、アタシの名前を覚えるわけ!!」

「お、落ち着け。な！」
「だったら、あんたの苗字を寄こしなさいよ！　そうすれば、覚えるでしょうが!!」
「え、ちょ！　川」
俺の肩をがっしりと掴むと、柔らかいものが唇にあたっていた。
川崎と俺との唇と唇が重なっていた・・・へぇ？　俺の脳がオーバーヒートしていた。いきなり、キスされたのだ。一瞬、なんでキスされたの？　全然、分からないんだけど!?
「これ、私のファーストキスだから・・・これで、あんたの苗字を寄こしなさいよ！」
川崎が顔を赤らめながら、そう言っていたが、俺は混乱していた。
・・・これは、嫌がらせとか、罰ゲームとかじゃないよね？　そのどっちかだったら、泣くよ？　いやマジで・・・
「あのさぁ・・・えっと・・・罰ゲームや嫌がらせじゃないよな？」
「あんた・・・アタシがドッキリでやると思う？」
「いや、すまん・・・」
川崎の真っすぐの瞳でありながら、どこか、恥ずかしそうにもじもじしていたのを見れば、嘘をついているとは思わなかったのだろう・・・
後々、知ったのだが・・・川崎の母ちゃんも父親に告ってたらしい・・・マジか、ど

んなけ、川崎家の女子は男らしいのか・・・

・・・そんなことを思い出していると、まさか、川崎と付き合って、結婚して、子どもを作るとは・・・

「でもさぁ、はーちゃんとさーちゃんと結婚するなんてね？」

「そうか？」

「そうだよ！　あのさぁ、はーちゃん。結婚って、女性は１６からだよね？」

「あぁ、そうだけど？　いきなりどうした？」

「じゃあさぁ、はーちゃんとさーちゃんの母校である総武に受かったらさぁ？　欲しいものがあるんだけど？」

「けーちゃん、何か、欲しい物あるのか？」

「はーちゃんの苗字、欲しいなって・・・」

「ちょ、けーちゃん!?」

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。完